

■ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

兼好法師は「徒然草」の中で、書物を読むことについて次のように述べています。

ひとり灯のもとに文(書物)をひろげて、見ぬ世の人(見知らぬ昔の人)を友とするぞ、こよなうなぐさむわごなる(何よりも心がなぐさめられることである)。

文は文選のあはれなる(心ひかれる)巻々、白氏文集、老子のことは、南華の篇。この国の博士ども(日本の学者たちの)書ける物も、いにしへのは(昔のものには)、あはれなること多かり。

(注) 文選——中国の詩や文章を集めた書物。
白氏文集——中国の詩人である白居易の作品集。
老子のことは——中国の思想家である老子の著書。
南華の篇——中国の思想家である荘子の著書。

また、江戸時代の詩人である菅茶山も「冬夜読書」という詩で、書物を読むときの心境についてこう表現しています。

雪は山 堂を擁して樹影深し
(山中にある家をおおって)(樹木の姿が黒々と見える)
檐鈴動かず夜沈沈
(しんしんとふけていく)

閑に乱帙を収めて疑義を思ふ
(整理して)(疑問の点)

一穂の青灯万古の心
(ひとすじの青い灯火が昔の人の心を照らし出してくれる)

(注) 檐鈴——軒下につるした風鈴。
乱帙——散らかった書物。

問一——線部「あはれなる」を現代仮名遣いに直しなさい。

問二 次の会話は、この「徒然草」と「冬夜読書」について、授業で話し合ったときの内容の一部です。あとのI、IIの問いに答えなさい。

Aさん 「どちらも、夜ふけに灯火の下で静かに本と向き合っているようですね。」
Bさん 「状況は似ていますが、私は違う点もあると感じました。『徒然草』では、本を読むことを [a] であると言っており、心がいやされているような印象を受けます。一方、『冬夜読書』は、何冊もの本を並べ [b] と言っているのです。調べものをしていただと思います。」
Cさん 「私は古典を読む意義について考えました。この二つの文章は、古典には [c] というすばらしさがあると、共通して述べているのではないのでしょうか。」

I [a]、[b]に当てはまる適切な言葉を、文中(文語文)から
aは六字、bは五字で抜き出しなさい。
II [c]に当てはまる内容を、二十字以内で書きなさい。